

台南市青少年訪問団派遣事業 —被災者招待型ツーリズムの人類学—

一條 文佳・沼崎 一郎

はじめに

- 第1節 台南市青少年訪問団とは
 - 第2節 理論的背景
 - 第3節 第1回台南市青少年訪問団の派遣
 - 第4節 第2回以降の訪問団の実施
 - 第5節 考察
- おわりに

(要約)

本稿は、東日本大震災を契機として行われた被災地支援事業の一つである台南市青少年訪問団において、台南市の人々と仙台の青少年がどのように交流していたのかを明らかにしようとするものである。台南市青少年訪問団とは、仙台市が交流促進協定を結ぶ台南市と、台南市を本拠とする財閥奇美グループとが、3年間にわたり、被災者支援の一環として仙台市の青少年を台湾に招待した事業である。本稿は、台南滞在中のプログラムと団員たちの行動、訪問後も継続する仙台と台南の交流の実態を民族誌的に記述するとともに、文化人類学的な観光研究と儀礼研究の視点から、この事業の意義を明らかにしようとするものである。震災を経験した団員たちは、招かれたゲストとして受動的に事業に参加するだけでなく、自身の経験した東日本大震災を「資源化」して能動的にホストと交流しており、その交流の様態は儀礼的な性格の強いものであった。

はじめに

本稿の目的は、東日本大震災を契機として行われた仙台市と台南市との青少年交流事業を題材として、日本と台湾との間に新たに構築されつつある市民間の相互交流の性格と意義とを文化人類学の視点から明らかにすることである。

これまで、災害が発生すると、ボランティア活動をする人々や、災害について知ろうとする観光客が被災地を訪れることが多かった。つまり、非被災者が被災地を訪問することが大半であった。しかし、2011年3月に発生した東日本大震災発生後は、被災地に暮らす人々が招待され、被災地の外を一時的に訪れるということが、市町村や民間主導の事業として広く行われた。東日本大震災発生後、海外から、支援の一環として被災地の人々を自国に招待したいという申し出が相次いだのである。これを受けて、東北地方をはじめとする被災地の人々、その中でも、特に青少年が相次いで海外諸国を訪問している。

このような事業は東日本大震災以前はあまり行われておらず、そのため学術的な先行研究もほとんど存在しない。そこで、東日本大震災発生当時、東北大学文学部で文化人類学を専修していた関美菜子と一條文佳は、このように被災者が被災地の外に招待されるという支援事業に参加して文化人類学的な調査を行い、このような事業を「被災者招待型ツーリズム」と名づけた(関・

一條 2013)。

本稿では、被災者支援の一環として被災者が非被災地に招待された事業の一例として台南市青少年訪問団に注目し、その活動を民族誌的に記述して、被災者招待型ツーリズムでは何が行われているのかを具体的に明らかにしたい。

著者らは、3年間にわたり、この事業に関わってきた。一條文佳は、学生として第1回目の台南市青少年訪問団に団員として参加し、その後もこの事業の研究を継続してきた。沼崎一郎は、台湾研究者として、また仙台市民として、この事業の仙台市側の主体である財団法人仙台国際交流協会¹（以下、SIRA）に協力し、仙台市での各種イベントに参加しつつ、この事業を見守ってきた。本稿は、このような著者らの体験に基づく実態調査報告である。

第1節 台南市青少年訪問団とは

台南市青少年訪問団（以下、訪問団）は、東日本大震災の支援の一環として行われたプログラムである。2011年4月、仙台市と協定を結ぶ台南市政府と、その台南市に本拠地を置く奇美グループが、「復興を担う人づくりこそ経済的支援にも勝る最も確かな支援である」という考えのもと、3年間で約300人の仙台の青少年を台南に招待したいと仙台市に申し出た（公益財団法人仙台国際交流協会 2012）。この申し出がきっかけとなり、仙台の若者が台南市に招待されることとなった。

この事業は、2012年2月に第1回訪問団が初めて台南市を訪問してから約3年間継続し、2015年3月に最終回である第9回訪問団の派遣をもって終了した。仙台市では、SIRAが事業を担当している。SIRAは団員数を1回あたり約30人と設定し、応募者の中から書類と面接による選考を行った。台南市からは、通訳やガイドを務めるサポーターと日本人留学生在が訪問団に同行した。サポーターは、現地で日本語を学ぶ学生であり、訪問先を案内できるように、日本人留學生と共に研修を重ねていた。そのため団員とは日本語で会話することができ、訪問先ではガイド役を務めたり、通訳をして団員の行動をサポートしたりした。団員とサポーターは帰国後も連絡を取り合っており、台湾と日本で不定期に会合を持ち、食事や観光を共にするなどして交流している。

第2節 理論的背景

1. ツーリズム

まず、これまでにツーリズム (tourism) がどのように論じられてきたかについて概観する。ツーリズムは、観光と訳されることが多いが、観光よりも広い概念である。しかし、従来のツーリズム研究の中心は、狭い意味での観光であった。ジョン・アーリは、「近代社会での大衆観光の大きな特徴は、あらゆる年齢層の大衆が基本的に労働と関係ない動機でどこかへ出かけ、何かにまなざしを向け、そこに滞在するということ」と述べている（アーリ 1995、9）。バレーン・L・

スミスは、「一般的には、旅行者とは非日常を体験することを目的として、自宅からはるか離れた土地を訪れる、一時的な有閑者のこと」であり、「観光活動＝余暇時間＋可処分所得＋地域に根づいた道徳観」と述べている（スミス 1991、1 頁）。橋本和也は、スミスやアーリの定義を踏まえた上で、観光を「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」と定義している（橋本 1999、55 頁）。

本稿で取り上げる台南市青少年訪問団では、招待側の台南市と奇美グループが航空費や滞在中の宿泊費・交通費などの諸経費を負担し、団員たちは土産代や一部の食費しか負担しなかった。また、訪問団に参加するまで台南市を知らなかったという団員もいた。団員らは、よく知られているものを一時的な楽しみとして売買したのではなく、むしろよく知らないものを体験することを目的とし、しかも、その体験は楽しみに限られるものではなかった。したがって、台南市青少年訪問団という活動は、スミスと橋本の定義する観光とは異なる。

神田孝治は、観光の定義は繰り返し議論され、いくつもの定義が提出されているものの、未だに有効な認識が提出されないとも述べ、その理由として、観光が複雑な現象であるために根本的に定義が難しいことと、定義に加えられる文化的視点の未熟さを挙げた（神田 2001、65）。神田はその上で、この「観光と認識すべき現象」とは、観光はまず旅などの「移動」と、レジャーなどの「楽しみ」との関係性で機能する概念であるので、この2つを含むものであり、かつ「まなざしであると同時に実践である、つまり想像的であると同時に現実的」であり、「目的地が『想像的かつ現実的な他所』でありそこで楽しむことを『主とする』という特徴」を持つものであると述べている（神田 2001、65 頁）。神田（2009、9 頁）も引用しているが、デヴィッド・クロウチは、レジャー／観光とは「人々の間で、人々と空間の間で、社会化され具体化されたものとしての人々の間で、かつレジャー／観光が利用できるコンテクストの中で発生」する「邂逅（encounter）」であるとみなしている（Crouch 1999、1 頁）。

以上の先行研究を踏まえ、本稿では、ツーリズムを「日常生活を営む場所から遠く離れた場所に移動し、そこに一時的に滞在するもので、その目的が日常生活にはない非日常を体験することにあるもの」と定義する。この定義における「非日常の体験」は、クロウチの言う「邂逅」をも含む。

このように広くツーリズムを定義する理由は、一條文佳が参与観察を行った台南市青少年訪問団において、「訪問団は観光ではない」という団員の発言があったことと、訪問団を主催するSIRAがこれを『観光旅行』を目的としたものではない」と強調していたことである。しかしながら、後に詳しく述べるように、訪問団は、いわゆる研修や修学旅行とも異なるものであった。観光やレジャーを目的とした旅行ではなかったのは確かだが、「娯楽」や「楽しみ」が皆無だったわけではない。むしろ「娯楽」や「楽しみ」は「交流」の重要な要素であった。しかし、「交流」は、「娯楽」や「楽しみ」以外の多くの要素を含んでいた。

そこで、本稿では、上述のようにツーリズムを広く定義し、台南市青少年訪問団の活動を民族誌的に記述することで、それがどのようなツーリズムであるのかを吟味していくこととする。

さらに、本稿では、ホスト、ゲスト、ガイドという概念を用いる。

バレーン・L・スミスは、ツーリズムが引き起こすインパクトを実証的に研究し、ツーリズムを、旅行者を受け入れる側すなわちホストと、ホストに歓待される旅行者すなわちゲストとが動的に相互作用する社会現象と捉えようとした（スミス 1991、17-22 頁）。スミスによれば、ツーリズムは「文化的な相互関係の正しい認識と国際的な理解への橋渡しをすることができる」（スミス 1991、14 頁）。

訪問団において、団員を迎えるサポーターや現地の日本人留学生はホスト、台南を訪れる団員はゲストである。

橋本和也は、観光客と観光地の間にあるずれの調整役として観光客と観光地を仲介するミドルマンが果たす役割は大きいと述べている（橋本 1999、4 頁）。観光客と長時間共に行動する添乗員や店の店員などがミドルマンにあたり、橋本はこれを「ガイド」と呼ぶ（橋本 2011、86 頁）。ガイドは、観光客とともに観光を創出しながらも、観光客と旅行会社、あるいは観光地の人々と観光客の間に入って、アイデンティティのゆらぎにさらされる存在である（橋本 2011、86 頁）。

東日本大震災を契機とした災害ツーリズムを研究した関美菜子も、「ホストとゲストの間を仲介する人々」を「ガイド」と呼んでいる（関 2013、9-10 頁）。関は、台南市青少年訪問団に関して、奇美グループの社員、サポーター、SIRA 職員は団員にとって「ホスト」兼「ガイド」であり、訪問場所の人々にとっては、彼／彼女らと団員の橋渡しをした奇美グループの社員、サポーターは「ゲスト」でると同時に「ガイド」でもあったと述べている（関 2013、161-162 頁）。台南市側にとっては、団員と台南市の橋渡しをした SIRA 職員は「ゲスト」であり「ガイド」でもあった（関 2013、162 頁）。

このように、訪問団事業においては、ホスト、ゲスト、ガイドは、時に役割を交代し、しばしば複数の役割を重層的に演じながら、相互作用を営んでいた。その様相を、本稿では詳しく読み解いていきたい。

2. 資源化

ツーリズム研究では、しばしば「資源」が論じられてきた。前述のバレーン・L・スミスは、ゲストが観光客としてラベリングされ、出身地のイメージを通して見られるようになり、同様にホストも好奇の目で見られるようになると述べている（スミス 1991、14 頁）。これに対して、ホストとゲストが互いにラベリングしあって見る／見られるだけではなく、見られる側が能動的に行為することで見せる／見せられるという関係性も生れることを指摘し、そこでは文化が「資源」として用いられていると主張したのが森山工（2007a、2007b）である。

森山は、文化をツーリズムの資源にすることを「引用」と呼ぶ（森山 2007a、61 頁）。その例として、森山は、風を送るためにウチワを扇ぐのではなく、扇いでみせることで何らかの主張をアピールするという行為を挙げ、引用とは、ある行為を本来の場から切り離して、新たな使用法を編み出して異なる場に位置づけることであると述べている（森山 2007a、61 頁）。そしてツーリズムにおいては、この引用という行為は、見る側の営為であるだけでなく見られる側の営為でもあり、見られるという受動性は見せるという能動性に、見るという能動性は見せられるという

受動性に容易に転化すると指摘している(森山 2007b, 65 頁)。つまり、ホスト／ゲストの関係は、受動／能動から能動／受動へと容易に変化するのである。

知識も、ツーリズムの資源として用いられる。山下晋司は、「埋もれた膨大な文化資料体のなかから、発掘され、価値づけられ、活用されてはじめて資源になる」と述べている(山下 2007, 48 頁)。つまり、文化の中から選び出された知識が資源となるのである。それでは、ホストはどのように知識を選び出し、資源にするのだろうか。クリスチャン・ダニエルスは、利用度・希少性・競争などの様々な要素に鑑みて、知識が有用であると認められると利用価値が鮮明化し、その利用価値の多寡によって人間が見出す希少性も生まれると述べている(ダニエルス 2007, 81 頁)。

このように、文化や知識が資源として用いられることを資源化と呼ぼう。文化の資源化とは、ホストがゲストに対して能動的に「見せる」ために自らの文化を「引用」することである。そして、知識の資源化においては、ホストは利用度・希少性・競争などの観点から、知識の利用価値を判断し、価値づけて、活用するのである。

たとえば、森山によると「〈自然〉の景観を売り物としてある観光地が市場化される時、その〈自然〉は純粹に〈自然〉のものであるというよりも、半ば〈文化資源〉と化した観光資源として〈資源化〉されているということが出来る」(森山 2007b, 66-67 頁)。

さらに、「〈資源化〉する主体を〈自〉と、〈資源化〉することによって、そしてそこにおいて目がけられている相手を〈他〉とするならば、そこには目がける／目がけられるという働き合いの中での自他の複雑な交錯がある」(森山 2007b, 67 頁)。すなわち、ツーリズムにおいては、資源化するホストと、資源化されたものを見るゲストとが、「目がける／目がけられる」という関係性において、相互作用を複雑に展開するのである。

森山によると、そこでは「(1)だれが、(2)だれを目がけて、(3)だれの〈文化〉を、そして／あるいはだれの〈文化〉へと、〈資源化〉しようとしているのか、という、〈文化資源〉をめぐる3つの〈だれ〉の関係性」が論点となる(森山 2007b, 67 頁)。

台南市青少年訪問団派遣事業においては、ホスト、ゲストによる文化や知識の資源化は行われているのだろうか。行われているとすれば、誰が、誰を目がけて、誰の文化を、そして／あるいは誰の文化へと、資源化しようとしているのだろうか。

3. 儀礼化

これまでのツーリズム研究ではあまり議論されてこなかったが、ホストとゲストとの間の相互行為を、儀礼という視点からも捉え直してみたい。

一般に儀礼と言うと、日常生活から断絶し、高度に様式化され、特殊な職能者によって行われる宗教的な儀式や政治的な式典を連想しがちである。しかしながら、ここでは、「社会文化的に規定された形式的な行動」(岸上 2009, 406 頁)という広い意味で儀礼という言葉を用いる。観光におけるホストとゲストの間の相互行為は、しばしば「社会文化的に規定された形式的な行動」と見なせるものが多い。したがって、観光もまた儀礼として捉えることができる。特に、台

南市青少年訪問団の活動は儀礼としての性格が強いのではないか。

儀礼の定義は様々であり、儀礼に含まれるべき要素についても、研究者間で一致した見解はない。しかし、ムーアとマイヤーホフは、その著『世俗的儀礼』において、儀礼には、①反復的である、②演技的である、③特異的である、④秩序立っている、⑤喚起的な表現である、⑥集合的な次元がある、以上6つの特徴があると指摘している（Moore and Myerhoff 1977）。

反復的であるというのは、儀礼は、同じ場所で、同じ内容、同じ形式を踏襲して行われるという意味である。台南市青少年訪問団は、ほぼ同じ内容、ほぼ同じ形式で、合計9回派遣されている。

演技的であるというのは、儀礼の参加者は、決まった役割を意識的に演ずるということである。台南市青少年訪問団の団員たちは、それぞれ入念に準備したパフォーマンスを行っているし、また被災地から招待されたゲストという役割を自覚して行動している。

特異的であるというのは、特別の行動や独特のスタイルがあるということである。また、特別のシンボルや道具が使われる。この点については、次節で具体的かつ詳細に記述する。

秩序立っているというのは、参加者、用いられる文化要素、行われる順序などが組織的に構造化されているということである。次節で明らかにするように、台南市青少年訪問団のプログラムは綿密に組み立てられている。

喚起的な表現であるというのは、儀礼は人々の興味を引きつけ、関心を引き寄せ、強い感情を喚起して、参加意欲を掻き立てるということである。台南市青少年訪問団事業は、東日本大震災を契機とし、震災発生直後の3年間に行われたものであり、ホスト側もゲスト側も強い参加意欲を示した。

最後に、集合的な次元があるというのは、儀礼は、単なる個人の恣意的な活動といったものではなく、より大きな集団の実施する行事であり、多くの人が参加することによって、共通の価値や意味を共有するという、社会的な意義を持っているということである。台南市青少年訪問団派遣事業は、台南市と仙台市との交流事業として行われたという点で、集合的な次元を有する。

したがって、本稿で取り上げる仙台市の派遣する台南市青少年訪問団と台南市側ホストとの交流は、儀礼の持つ6つの特徴を備えていると考えられる。それでは、なぜ台南市青少年訪問団派遣事業は、儀礼的な性格を示すのだろうか。そして、国際交流事業が儀礼的であることには、どのような意味があるのだろうか。

第3節 第1回台南市青少年訪問団の派遣

1. 台南市訪問

以下では、第1回台南市青少年訪問団が台南市に滞在した時の様子を紹介する。団員30人は、前述の通り、「仙台市内に居住するか仙台市内の大学に通う青少年」の応募者の中から選ばれた。

台南市を訪れる前に、団員たちは3回の事前研修に参加し、訪問中に予定されている交流会での出し物を何にするか、日本と仙台について何を紹介するか、震災後の仙台の現状について何を伝えるか、そして伝える手段をどうするかについて意見交換をした。団員からは、震災の被害の

様子や海外から受けた支援について伝えたいという意見が出た。

また、事前研修では、台南市を紹介する DVD を見たり、簡単な中国語の挨拶を学んだりした。団員の中には訪問団への参加申込みをきっかけに初めて台南市を知ったという人が複数いた。台南市を知らなかった団員は、台南市がどのような土地であるのか全くイメージを持っていないか、持っていたとしても研修で見た DVD や雑誌から得た情報に基づくイメージだけか、そのどちらかであった。団員の中には台南市の観光情報を掲載している観光ガイドブックを探す者もいたが、ガイドブックを見ても台南市の紹介は数ページのみに留まっていることが多いのが実情であった。情報を求めてガイドブックにあたった団員たちは「台南が載っていないことが多い」と嘆いていた。このように、団員が訪問前に得た台南市に関する情報は、ほとんどが研修によるもののみであった。

第 1 回訪問団は、2012 年 2 月 16 日から 26 日までの日程で台南市を訪問した。以下では、滞在中の様子を簡略に記述する。

2 月 16 日の夕方に仙台空港を出発し、桃園国際空港に到着した後、新幹線で台南市へと向かった。滞在中は、台南市内にある宿泊先の樹谷会館（奇美グループの所有する建物）が訪問団の拠点となった。また、台南市側がカメラマンを同行させていた。このカメラマンは、訪問団の様子を映像で記録したり、団員にインタビューをしたりしていた。

17 日は、活動班に 1 人ずつ付く現地の学生サポーター、全体のサポートにあたる日本人留学生（男女各 1 名、以下、男子学生を SS、女子学生を HA と表記する）、現地学生（男女各 1 名、学生サポーターの仕事をサポートする）との初顔合わせと交流会を行った。この交流会では、団員が東日本大震災の概要・被害状況について説明し、2012 年 2 月時点での復興状況や写真展などの取り組みについてのプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションは、サポーターや奇美グループの職員たちに向けたものである。

ここで日本人留学生 SS についても説明する。SS は通訳やガイドを務め、団員とサポーターのまとめ役になっていた。後に訪問団の報告書の中では「リーダー・通訳」と説明される人物である。班ごとに行動したり散策したりする時は、各班のサポーターが通訳やガイドを担当したが、訪問団全員がまとまって行動する時には、SS と HA が担当した。また、SS は団員やサポーターと積極的に会話し、時には冗談を言うなどして、ツアーを盛り上げていた。同行した SIRA 職員の中には、後に SS の存在に助けられたと話す人がいた。以上のことから分かるように、SS は訪問団の中心人物であった。彼は後に派遣された第 2 回以降の訪問団でも同様の役割で参加し、第 1 回と同様に訪問団をまとめあげていた。

18 日は愛国婦人館という建物で台湾茶を体験した。団員たちに出された茶の中には、1999 年の 921 地震をきっかけに誕生した「凍頂貴妃烏龍茶」があった。茶師の話によれば、このお茶ができた経緯は以下のとおりである。

「921 地震」の際、茶畑までの道が通行不能になり、農家は手入れができなかった。そのため、茶の木が虫食いの被害にあった。しかし、茶の木は虫に葉を食べられると、虫を追い払うための独特な成分を作りだすようになった。この成分は、茶葉として加工した後にはちみつのような甘

い香りに変化する上、人に無害な成分でもあったので、農家は新しい種類のお茶として作り続けている。

団員たちは虫食いが茶葉の香りを良くしたという話に驚き、茶の器の香りをかいでみたり、隣の団員と顔を見合わせたりしていた。ある団員は、同行したカメラマンによるインタビューの中でこのお茶について「震災によってできたのが、悪い物だけじゃなかったっていうことに、感動した」、「すごいなあと思います」と話していた²。このように団員たちは、震災の支援として招待された台南で、別の災害の経験を当事者から聞くことになったのである。その後は孔子廟の見学などを行ったほか、夜には現地で台湾の先住民族や宗教についての授業を受けた。

19日は奇美グループが所有する奇美美術館を見学した後、屏東県の山奥にある、パイワン族の暮らす集落へと向かった。村に入るための儀式として、団員たちは順番に火をまたいだ後、つり橋を渡って山道を登って集落に入った。原住民文化について学ぶことが目的であった。

しかし、団員たちは、パイワン族のガイドから、2009年に発生した八八水害による被害についての説明を受けることとなった。水害によって、道が分断されたり鉄砲水が発生したりして、村に住み続けるのは危険だと判断されたため、住民たちは別の場所に集落を作り、畑の手入れの時のみ山道を通って村に来ている。一行は、別の場所にある教会も見学した。パイワン族のガイドによれば、この教会では、水害の際に出た流木を用いて作られた十字架やテーブルを使用しているそうだ。この集落訪問は団員たちにとって、台湾茶体験に続いて台湾の災害の経験談を聞く2回目の機会となった。

20日はルカイ族の暮らす阿禮村（アデル村）へ向かった。道中には、八八水害によって山の斜面が削られて地面がむき出しになっている場所がいくつもあり、大型バスでは道が狭すぎて通れないため、一行はマイクロバスに分乗した。水害では鉄砲水や土砂崩れによって広範囲の山道が通行不可になったり、破壊されたりしたそうで、修復されないままカラーコーンが置かれているだけの道もあった³。団員たちは窓の外を眺めながら「(バスの幅が) すれすれだよ」とつぶやいたり、写真を撮ったりしていた。道中、マイクロバスが斜面を下りて川を横断する場面があった。川の幅はあまり広くなかったが、谷底には砂利が大量に引かれ、重機が複数置かれていた。また、谷の斜面は土がむき出しになっており、この谷が土砂崩れと鉄砲水によってできたものであることが一目で分かった。団員たちはこの谷を通る間、「うわあ」、「えー」という声をあげ、じっと窓の外を眺めて、水害の跡を生々しく感じていたようであった。ルカイ族の村では、日本統治時代に義務教育を受けた老人が、当時のことを日本語で団員に説明した。

21日には烏山頭ダムを見学した。現在は公園となり一般に公開されている。このダムは、日本統治時代に八田與一という日本人が水路と共に建設し、嘉南平原の農業に貢献したものだとの説明を受け、団員たちは感心していた。このダムでは班ごとではなく訪問団がまとまって行動し、主にSSが説明を担当していた。このようにSSが（時にHAも）訪問団全体に通訳やガイドをすることが多かった。その後、後壁区菁寮にて伝統家屋に宿泊した。菁寮は田畑に囲まれた静かな村で、台湾の伝統家屋である三合院の家が保存されている。夜は家屋の敷地内で宴会が開かれた。団員の中から男女1人ずつが結婚式の衣装を着て登場し、机の上には結婚式で食べる料理が

出された。宴会は結婚式の疑似体験を兼ねており、現地住民やサポーターが結婚式の作法や料理について団員に教えていた。

22日には、サポーターたちとの交流会が開かれた。団員たちはサポーターから海帯拳という台湾のゲームを教えてもらおうと、活動班で対抗戦を行った。海帯拳は日本のいわゆる「あっちむいてほい」に非常に類似したゲームであった。優勝者が決まると他の団員の歓声があがるほど、ゲームは白熱した。

23日の夜は花園夜市で自由行動を取った。夕食も兼ねており、団員もサポーターも、好きなものを購入して食べていた。サポーターは団員を連れて屋台の中を案内したり、売られている料理の説明をしたりした。また、屋台には投げ輪などのゲームを楽しめる店や、ポーチや衣服を売る店があった。サポーターが団員に店を勧めることもあったが、団員がサポーターに「ネックレス買いたい」とリクエストし、サポーターが店まで案内するような場面の方が多く見られた。また、夜市内でサポーターの知り合いと偶然会って話しこんだり、サポーターの家族が団員に会いに来たりすることもあった。

24日は、周辺を散策してからホテルのロビーで朝食を取った後、大洲地区に作られた「生態地区」を見学した。この大洲地区は、奇美グループの樹谷文化基金が地元住民の憩いの場として作ったものである。地区の中には引退した水牛が暮らせる牛舎が作られていて、一行は実際にその牛舎を見学した。その後、一行は樹谷会館に戻って昼食を食べた後、敷地内でロッククライミングを体験した。

25日は現地の一般家庭に滞在するホームビジットが行われた後、樹谷会館内でお別れ会が開かれた。参加したのは団員、SIRA 職員、奇美グループの職員と社長、サポーター、ホストファミリーだった。ツアー中の写真を使ったスライドショーの鑑賞や、ホストファミリーを交えての伝言ゲームをした。また、サポーターたちは自分たちで考えたというダンスを披露した。ダンスは手や足の動きを使った振付で、サポーターたちはポップミュージックに合わせて踊っていた。団員たちは仙台市の郷土芸能である「すずめ踊り」や「世界に一つだけの花」の合唱を披露し、サポーターと団員と一緒に中国語で「涙そうそう」を合唱した。その後、サポーターが1人ずつマイクを持って、参加しての感想や、担当した班のメンバーとの思い出や感謝の言葉を語った。語り終わると、班のメンバーがサポーターの元へ行って抱き合った。サポーターも団員も涙ぐんで目が赤くなっていた。最後に、サポーターは団員へ写真をプレゼントした。団員からは、サポーターや留学生、奇美グループの職員たちに寄せ書き、千羽鶴、Tシャツをプレゼントした。プレゼントの交換を済ませ、お別れ会は閉会した。

26日の朝、団員たちは樹谷会館を出発して帰国した。出発直前に台南近郊で強い地震が発生して交通機関が乱れた。この教訓から、第2回以降は帰国前夜に台北にて宿泊することになった⁴。

2. 帰国後の交流

第1回の訪問団の公的な集まりは、後述の事後研修をもってひとまず終了した。その後、有志によりインターネットを介した会話が可能な Skype で台南のサポーターたちと会話しながらの

食事会が催された。また、団員同士での花見会が企画され、参加可能な団員が大河原市の一目千本桜を見るために集まった。さらに、サポーターのうち4人が留学やワーキングホリデーを目的として来日した。滞在先は新潟、大阪、東京、高知であったが、全員が仙台を訪れて団員と再会を果たしている。また、現地でサポートを行っていた日本人留学生のSSとHAも、一時帰国した際に仙台を訪れて団員およびSIRA職員と再会を果たした。このような時、団員たちが事前に連絡を取り合いながら、宿泊先やどこにサポーターを連れていくかについて検討し、サポーターを連れて宮城県内を案内した。また、買い物や施設への入場を手伝うこともあった。サポーターは団員の案内に従って行動しており、台南滞在中とは立場が逆転した。来仙したサポーターの1人は「観光地に行くのもいいけれど、それ以上に団員に会いたい、みんなに会えたらどこでも嬉しい」、「みんなと話せるならなんでもいいよ」と話していた。同時に仙台に来ていたもう1人のサポーターが、この言葉を聞いて何度も頷いていた。サポーターの来仙の目的は仙台を観光することではなく、団員と再会することであるのだと分かる。

帰国後に団員と同行職員が公式に集まったのは、3月10日の第1回事後研修である。この研修では、団員たちが感想や反省点について話す時間が設けられた。団員たちの間では、訪問は楽しく、貴重な経験だったという点ではほぼ一致していたが、一方で、台南の学生サポーターの通訳やガイドについては、「ありがたかった」が、「自分たちは頼り過ぎ」だった、「頼りっぱなしで申し訳ない」という意見が相次いだ。これは第1回に限ったことではなく、以降の訪問団の事後研修においてもよく聞く反省である。特に、同年8月に実施された第3回訪問団の事後研修では顕著であり、この時団員からは「『それ、ガイドに書いてあったよね』っていうことを、日本語が分からないサポーターが一生懸命伝えようとしていて、切なかった」、「事前研修も少ないし、こっちは台湾の知識少ないのに、向こうは日本の知識が多い。その差が残念でした」という自省のコメントが相次いだ。実際に、台南市滞在中に団員が使用する言語はほぼ日本語である。店での買い物や、レストランでの注文では団員がサポーターに日本語で希望を伝え、サポーターが通訳をする、という場面が多く見られる。また、台南市側から訪問団に参加した日本人留学生SSは、まとめ役として訪問団に大きく貢献していた。SSはそれまでに実施された全ての回に参加しており、どの回においてもサポーターと団員の交流の橋渡し役を務め、中心的な存在となっていた。SSが果たした役割の大きさは、SSが仙台を訪れた際に第1回から第3回までの団員と一緒に集まる交流会が催されたことから明らかである。

また、第3回に同行した職員は、「4回、5回と回を重ねるにつれ、ツアーの意義が薄くなると思うんですね。その辺、意識したいです」と発言し、訪問団の意義や団員の意識について俯瞰的な視点を持って考えていた。

第4節 第2回以降の訪問団の実施

第2回以降の訪問団で実施された活動内容は、大部分が第1回と同じであるが、前回までの反省や団員からの意見を生かして、一部が変更となることもあった。中でも、第3回から第5回に

かけては仙台についてPRする機会(訪問団では「仙台PRイベント」と呼ぶ)が設けられ、団員たちは台南市民に向けて積極的に震災に関する情報を発信することとなった。団員たちは、書道や浴衣の試着などを通して日本文化の紹介をするだけでなく、震災後の現状を紹介する活動を行った。

第3回では、団員たちが支援を感謝するメッセージを書いた紙を持ってステージに立ち、現地の一般市民に向けて震災支援への感謝を伝えた。第4回の団員たちは、訪問前に石巻復興商店街・気仙沼復興マルシェ・陸前高田の月山神社・中野小学校を訪ねて人々にインタビューし、その動画をイベントで放映した。第5回は日本で復興ソングとして知られている「花は咲く」を歌い、震災の様子をスライドにして展示した。また、第4回と同様に、事前に被災地からのメッセージを撮影して持参し、ビデオレターとして贈呈した。

団員たちは、これらの活動のために事前研修にて内容の検討と発表の練習をしたり、研修の時間以外にも自ら進んで時間を作ってビデオ撮影をしたりして準備を進めた。そしてできあがったメッセージや映像を台南に持参し、台南市民に向けて披露したのである。

第5節 考察

それでは、以上の記述から明らかになった点を要約し、台南市青少年訪問団事業における資源化と儀礼化の意義を検討しよう。

要点は以下の3点である。

第1点は、訪問団の台南滞在中、団員と現地の人々とは、互いの被災経験を伝え合うことになったことである。団員たちはサポーターや奇美グループの社員に向けて震災被害や現状について発表をする機会があった。また、のちにDVDに収録されたインタビューの中で、自分の被災経験を語る団員もいた。一方で、先住民族の村落の訪問や愛国婦人会での中国茶体験を通して、台湾において発生した過去の水害や災害の被害を見聞きし、乗り越えた人々の様子を目にした。団員と台湾の人々は、自分たちが経験した災害の記憶や感情を、互いに伝え合うこととなった。これをきっかけに、自分が経験した震災を改めて振り返る団員もいた。当初、台南側は、被災地を離れた台湾で被災者である団員たちに癒しと回復を提供したいと考えていたようであるが、団員たちは訪問先で同じような被災体験を発見し、共有することとなったのである。そして、その結果、回を重ねる毎に、震災体験の共有が訪問の主要な目的となっていった。

第2点は、訪問団には中心的な人物が存在したということである。サポーターと共に通訳やガイドを務めた、現地の日本人留学生のSSである。SSはサポーターと団員のまとめ役でもあり、また第3回までの全ての回の訪問団に参加した人物でもある。SSが予告せずに交流会に参加することが、団員たちへの「サプライズ」となったことから、訪問団においてSSがいかに重要な存在であったかが分かる。

第3点は、訪問を終えた後も、団員やサポーターはSNSでの会話を通して交流を続けているということである。さらに、サポーターや日本人留学生が来仙すると、団員たちがガイド役となっ

てサポーター達を案内していた。団員が案内役を務め、サポーターはその案内に従って宮城県内を観光しており、ツアー中とは立場が逆転したことが分かる。仙台を訪れたサポーターの「観光地に行くのもいいけれど、それ以上に団員に会いたい、みんなに会えたらどこでも嬉しい」という言葉からは、団員とかかわり続けることや、再会することを強く望んでいたことが分かる。また、訪問から1年半が経過した後で台湾へ留学した団員に対して、「会おう」という声がかかるほど、長期に渡って交友関係が維持されている。

1. 資源化

ここで注目したいのは、訪問団が台湾に滞在する間、ホストにとってもゲストにとっても、災害が交流の「資源」となったことである。団員たちは台湾で発生した921地震の結果として生まれた台湾茶を飲み、その経緯を知った。また、パイワン族の部落を訪問し、八八水害の被害と移住を余儀なくされたという経験談を聞いた。つまり、ホストである台湾の人々が自ら経験した災害を資源化し、ゲストである団員たちに「見せた」のである。しかし、団員たちはただ単にゲストとして災害ツーリズムに参加しただけではなかった。彼らは、サポーターたちへのプレゼンテーションや仙台PRイベントにおいて、東日本大震災の被害や現状を報告し、支援への感謝を伝える活動をした。収集した情報や自身の経験談から、サポーターや台南市民に伝えるべきと思うものを選別し、プレゼンテーションや映像資料として活用して、台南に持参した。団員たちはそれらを「見せ」て、台南市民は「見せられた」。団員たちはゲストでありながら、東日本大震災を資源化し、ホスト社会に持参した。台湾の人々は、ホストでありながら、東日本大震災を、台湾にいながらにして「見る」こととなった。

このように、訪問団においては、ホストである台湾の人々と、ゲストである団員たちが、自身の経験した災害を能動的に資源化し、互いに見せ合うという現象が起きていた。能動的に「見せる」ことと、受動的に「見せられる」ことの両方を、一つのツーリズムの中で、ホストとゲストが共に経験したのである。

2. 儀礼化

次に注目したいのは、ホストである台湾の人々とゲストである団員たちによる災害の資源化が、儀礼的に行われているということである。災害を「見せる」ことも「見せられる」ことも、一定の順序を保って、秩序正しく行われる。何をどのように「見せる」かも、それをどのように「見せられる」かも、慎重に準備されている。

それは決して堅苦しいとか、ぎこちないとか、まじめぶっているということではない。そこには、遊びも笑いも含まれている。若者たちは、十分に楽しんでいることは確かである。しかし、訪問団の行動パターンは、十分に形式化され、決まった順序に従っている。したがって、訪問団の活動は秩序だっており、若者たちの行為は演技的である。ホスト、ゲスト共に参加意欲は高く、プログラムは喚起的表現に富んでいる。また、この3年にわたり、同様の形式と順序を守った訪問が反復されている。そして、この交流事業が東日本大震災を契機として始まり、災害の資源化

を行っているという点で、その特異性は明らかだ。最後に、交流促進協定締結都市の友好と協力を通じた震災復興という共通の価値と意味とが、この交流事業には込められており、その社会的意義は参加者にも周囲の人々にも明らかだ。これは、やはり儀礼なのである。

台南市訪問団派遣事業が儀礼化された理由は2つあると思われる。

第1に、これは仙台市が公式に行う国際交流事業であり、市民外交である。単純な話であるが、失礼があってはならないし、混乱が起きてはいけない。順調に交流をし、相互理解を得て終わる必要がある。となれば、形式性や順序性を重んじないわけにはいかない。

第2に、より重要な点であるが、これが復興支援事業の一環として台湾側にも仙台市側にも理解されていることがある。それは、主催者だけでなく、ホストである台湾側の人々にも、ゲストである仙台市側の団員にも共有された認識だろう。被災地の復興とは、人類学的に見れば「再生」である。つまり、被災者招待型ツーリズムは、被災者が再び通常の生活者として生まれ変わる旅でもあるわけだ。仙台から台南に被災者を招くことは、当初そのようなものとして企画された側面がある。しかし、3年間の間に、若者たちの交流を通して、新しい関係性も生まれている。「再生」だけでなく「創生」も見られるのである。

梶原景昭は、儀礼の意義を次のように述べている(梶原 1994、213頁)：

くりかえしと秩序は、儀礼が宇宙の過程を反映していることを示し、演ずることおよび形式化は、儀礼が注目を惹き、懐疑を忘れさせる装置であることを物語る。そして以上の属性すべてによって、儀礼は真正かつ注目すべきメッセージを伝えるための理想的な媒体と考えられる。

単なる観光旅行でもなく、単なる研修でもなく、単なる娯楽でもなく、儀礼であるからこそ、台南市青少年訪問団派遣事業は、正式な「交流」と認識され、その結果、ホストは被災地である仙台と東日本大震災がもたらした被害について公式で純正な知識を得たと確信でき、またゲストは台南という都市とその文化だけでなく921地震や八八水害といった台湾の大災害についてガイドブックなどからは得られない直接的で確かな知識を学んだと実感できるのである。

おわりに

本稿では、台南市青少年訪問団事業を被災者招待型ツーリズムとして取り上げ、その実態を民族誌的に記述した。台南市青少年訪問団においては、現地のサポーター、日本人留学生、奇美グループの社員はホストに、訪問団の団員とSIRAの職員はゲストとなった。ところが、盛んな交流が継続し、サポーターが仙台を訪れるまでになった台南市青少年訪問団では、サポーターや留学生の来仙時に団員が案内役を務めていた。つまり、団員がホストに、サポーターと留学生がゲストとなり、台南市訪問中とは立場が逆転したのである。彼/彼女らは、台南市と仙台市では別の立場となり、互いにホストでもありゲストでもあるという、二重の関係性を持つことになった。この関係性の再生産は、彼/彼女らのつながりを強め、さらに交流が継続する要因となっている。

被災者招待型ツーリズムとして始まった交流であるが、訪問活動を越えて、仙台と台南の若者

たちの親密な関係が生まれ、SNS や相互訪問・留学を通して継続している点で、台南市青少年訪問団は新たな日台間の人的交流のモデルとして注目すべきだと思われる。この事業は3年間で一応の終結を迎えたが、さらなる交流事業を始めたいと活動を始めている団員もいる。仙台市と台南市の間で生れた若者たちのネットワークが今後どのように展開するかは未知数であるが、その発展に著者らも積極的に協力していきたいと考えている。

そこで重要となるのが、ホストとゲストの双方が、何を資源化し、互いに「見せ」あうかであろう。台南市青少年訪問団では、ゲストである団員たちは日本文化・仙台文化に加えて東日本大震災を資源化してホスト社会に持参し、ホストである台南市側は、台湾文化・台南文化に加えて近年の災害を資源化してゲストに提供した。災害というものは、貴重な体験と教訓をもたらすとはいえ、深刻な被害と多大の苦痛を伴うものである。それゆえに、その資源化は儀礼的に行われたのであろう。災害という非日常を儀礼的に資源化し、共有したという点に台南市青少年訪問団の特徴がある。それが被災者招待型ツーリズム一般の特徴と言えるかどうかは、今後さらなる研究を必要とする。

仙台市と台南市の市民交流を今後も継続発展させるためには、災害の儀礼的な資源化だけでは不十分であろう。もちろん、仙台の人々の東日本大震災の体験も台湾の人々の921地震や八八水害の体験も、決して風化させてはいけぬ。しかし、両者の災害体験を風化させないためにも、市民交流を多面的に継続発展させることが求められよう。そのために、災害以外に何が資源化できるのか、その際に儀礼化も必要なのかは、実践を通して検証していく必要があるだろう。そのような実践への取り組みを誓って、本稿の結びとしたい。

注

- 1 仙台国際交流協会（通称：SIRA）は、2015年4月1日に仙台観光コンベンション協会と組織統合し、仙台観光国際協会（通称：SenTIA）となった（公益財団法人仙台観光国際協会 2015）。本稿では、便宜的にSIRAの通称を用いることとする。
- 2 訪問団の活動には台南市側のカメラマンが同行し、活動の様子を撮影したり、団員にインタビューしたりしていた。後に、映像を編集し収録したDVDが、団員と関係者に配布された。
- 3 ガイドの暮らしていた村は、生活できるような状態ではなくなり、政府から移住するよう勧告が出されたこともあり、別の地域に村を移転したという。
- 4 なお、第2回・第3回訪問団の内容も、一部の変更はあるものの、第1回とほぼ同じである。

参考文献

日本語

- アーリ、ジョン（1995）『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』加藤宏邦訳、法政大学出版会。
- 梶原景昭（1994）「儀礼」石川栄吉他編『文化人類学事典』弘文堂、213-214頁。
- 神田孝治（2001）「2章 観光、空間、文化——観光研究の空間／文化的転回へ向けて」橋爪紳也・田中貴子編『ツーリズムの文化研究』京都精華大学想像研究所ライブラリー、27-70頁。
- _____（2009）「序章 観光の空間について考える」神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、3-13頁。
- 岸上伸啓（2009）「儀礼と再生」日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善、406-407頁。
- 公益財団法人仙台観光国際協会（2015）「公益財団法人 仙台観光国際協会サイト」〈<http://www.sentia-sendai.jp/>〉、2015年4月20日取得。

-
- 公益財団法人仙台国際交流協会 (2012) 『台南市青少年訪問団報告書』財団法人仙台国際交流協会。
- 五島利兵衛・荘国備 (1991) 「台湾・澎湖島三合院民家調査 :1990年8月および12月の調査報告」『大同工業大学紀要』27、97-114頁。
- 関美菜子 (2013) 「東日本大震災と『災害ツーリズム』の人類学的研究」東北大学文学部、卒業論文。
- 関美菜子・一條文佳 (2013) 「被災者招待型ツーリズム—震災をきっかけに生まれる交流」、総合観光学会編『復興ツーリズム：観光学からのメッセージ』、同文館出版、255-262頁。
- スミス・L・バレーン (1991) 「序論」バレーン・L・スミス編、三村浩史訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房、1-24頁。
- ダニエルス、クリスチャン (2007) 「資源としての伝統技術知識」内堀基光編『資源と人間』弘文堂、75-108頁。
- 橋本和也 (1999) 『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社。
- _____ (2011) 『観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』京都：世界思想社。
- 見田宗介・栗原 彬・田中義久編 (1992) 『社会学事典』弘文堂。
- 森山 工 (2007a) 「4—文化資源の考え方」内堀基光・菅原和孝・印東道子編『資源人類学』放送大学教育振興会、52-63頁。
- _____ (2007b) 「5—観光資源と知的資源」内堀基光・菅原和孝・印東道子編『資源人類学』放送大学教育振興会、64-77頁。
- 山下晋司 (2007) 「文化という資源」内堀基光編『資源と人間』弘文堂、47-74頁。

英語

- Crouch, David (1999) "Introduction:encounters in leisure/tourism," David Crouch (ed.), *Leisure/Tourism Geographies:practices and geographical knowledge*, 1-13, Oxon and New York: Routledge.
- Moore, S. F. and Myerhoff, B. G. (1977) *The Secular Ritual*, Amsterdam: Van Gorcum.

(2015年10月12日投稿受理、2016年2月7日採用決定)